

金窪城跡と金久保内出遺跡との関係

金窪城跡は、金久保内出遺跡の北西に位置する平城です。現在には堀と土塁の一部が残るのみです。伝承では、治承年間(1177~1180)に武蔵七党の丹党庶家である加治家季が築城し、天正10年(1582)の神流川合戦において、滝川一益に攻め落とされた城として知られています。元禄11年(1698)の知行替えにより廃城になったと伝えられています。

今回の調査で確認された第22号溝跡は、幅約4.8m、深さ約2.5mの大型の堀跡で、南北に延びています。側面の傾斜がきつく、底面が幅狭く掘り込まれた薬研堀です。おそらくは防御的要素が強い堀跡と考えられることから、金窪城跡との関連が想定されます。



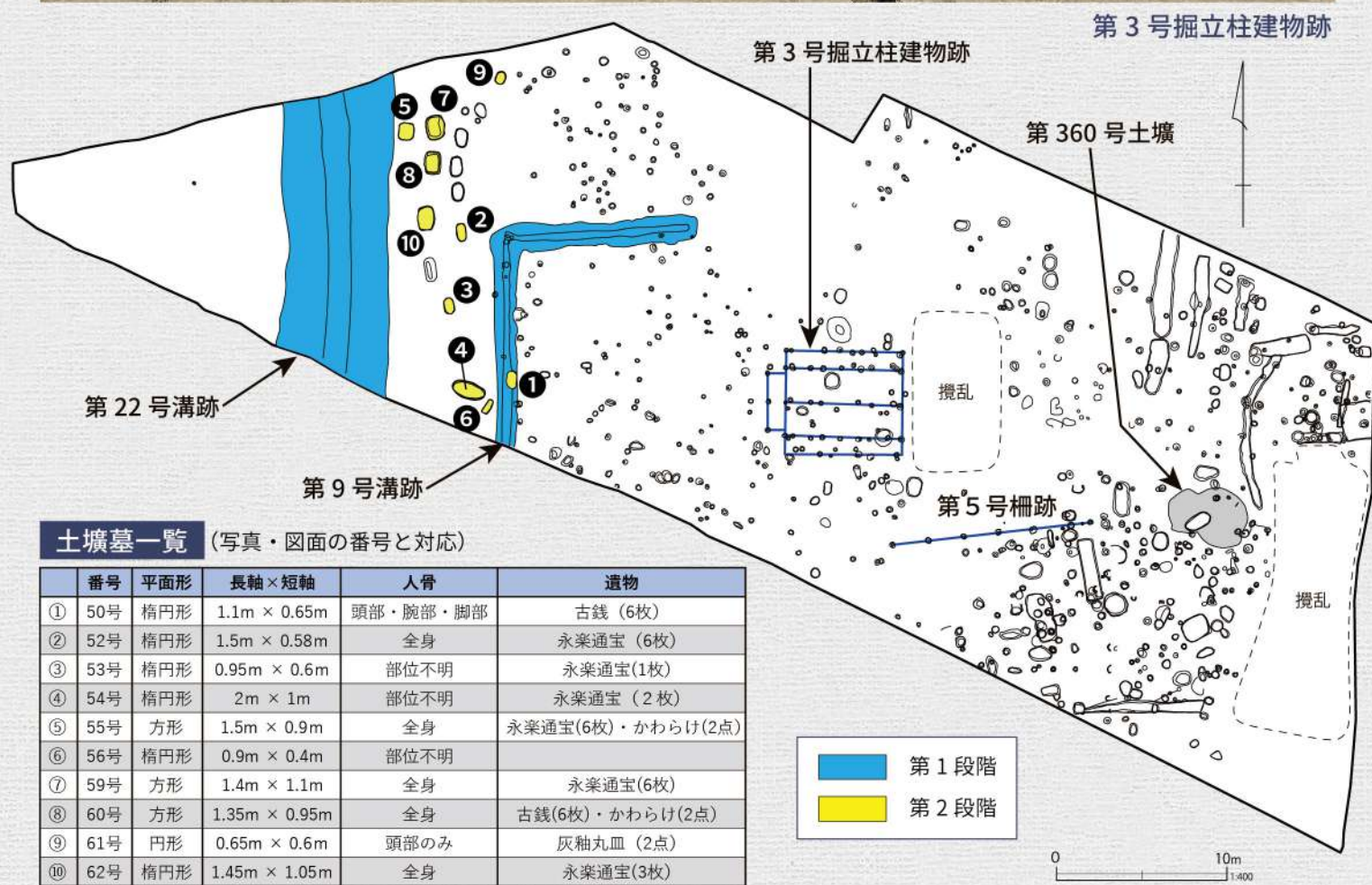
かなくぼうちで

上里町 金久保内出遺跡 (第3次)



金久保内出遺跡は、神流川扇状地末端に立地する古墳時代から中世の遺跡です。第3次調査では、中世の掘立柱建物跡、堀跡、土壇墓をはじめ、古墳時代の竪穴住居跡、祭祀関連遺構が発見されました。中世の金久保内出遺跡の周辺には、金窪城跡や陽雲寺、金窪神社が存在し、関連が考えられます。今回の発掘調査で見つかった遺構や遺物は、上里町の歴史を語る貴重な発見です。

金久保内出遺跡 (第3次) 第3地点



※屈葬人骨(横向き)



※屈葬人骨(横向き)



※屈葬人骨(仰向け)



※屈葬人骨(仰向け)



※頭部のみ埋葬



第61号土壇

灰釉丸皿(16世紀中頃～17世紀初頭)



永楽通宝



かわらけ(16世紀中頃～17世紀初頭)



かわらけ(16世紀中頃～17世紀初頭)

確認された中世の遺構群は、大きく2段階に分かれます。

第1段階(図面 青色)は、調査区の中央付近に第3号掘立柱建物跡、その西側に第9号溝跡、堀跡(第22号溝跡)があります。第9号溝跡が、第3号掘立柱建物跡と方向をそろえて「L」字形に囲むように巡っていることから、居館などの一部である可能性があります。

第2段階(図面 黄色)は、第9号溝跡と第22号溝跡の間に土壇墓群が営まれています。死者は手足を折り曲げた姿勢で埋葬されています。食器や銭もいっしょに納められていました。

発見された中世の遺構の時期は、遺構の特徴や出土した遺物などから16世紀から17世紀初頭と考えられます。周辺にある金窪城跡や陽雲寺と存続時期が重なります。また天正10年(1582)にはこの地で神流川の戦い(かんながわ)が occurred しました。